




地域の底力

# 温泉とともに生き さらなる未来を切り開く 大分県別府市・由布市

日本有数の温泉観光地である  
別府市・由布市は、  
震災を機に新たな一步を  
踏み出そうとしている。  
その前進を牽引するのは、  
温泉が培ってきた人々の心だった。



上／12kmにわたりV字型の断崖が続く由布市の「由布川峡谷」はそのダイナミックな景観から「東洋のチロル」とも呼ばれる。下／あちこちから湯煙が立ち上る、別府市の別府温泉。この地に温泉が湧くことは、古代から知られていた。

取材・文  
山内史子  
写真  
野瀬勝一

## 「おんせん県」が生んだ 官民手を取り合う力

日本一の湧出量と源泉数を誇る別府市の別府温泉、それに次ぐ由布市の由布院温泉は、大分県の、いや日本を代表する温泉観光地だ。今回は、二〇一六年四月十四日から十六日に起きた熊本を震源地とする地震でそれぞれに被害を受けた二市を訪ね、現状と未来への展望を伺った。

最初に訪れたのは、別府市。高台から眺めれば目の前にはあちら



別府温泉の源泉数は約2200。多彩な泉質を活かした「別府地獄めぐり」は、観光客に人気が高い。写真はその一部、マリンブルーに魅せられる「海地獄」と、酸化マグネシウムや酸化鉄を含んだ熱泥が湧く「血の池地獄」。

こちらから湯煙の上がる平野が広がり、先には別府湾が望める。奈良時代の「豊後国風土記」に「赤湯の泉」等と記載されているが、いにしえから人々は温泉とともにこの景色に魅了されたであろうことは想像に難くない。

震災時は建物の全壊、半壊を含め被害はあったものの、旅館を含め観光施設に関しては営業に大きく差し障るほどではなく、悩まされたのはむしろ風評被害だったと振り返ったのは、「べつぷの宿白菊」代表取締役社長の西田陽一氏だ。

「地震の翌日から、とにかくキャンセルの電話が鳴りつ放しでした」その状況を打破するために展開したが、五月一日に地元の大分

合同新聞の一面を飾った「Go! OITA おおいたへ行くこう」の広告。ユーモアを効かせた内容で、全国的な話題になった。

「旅というのは幸せであり、楽しみです。なので重たい雰囲気ではなく、クスツと笑えることを発信しようと思ったんです」

内容はもちろんのこと、震災から約二週間後にリリースという迅速な動きにも驚かされたが、背景には一一年に世間の耳目を集めた「おんせん県」宣言があったと西田氏は話す。

「それまで大分県は情報発信下手で、行政は観光振興にあまりお金を使っていませんでした。それでも別府や由布院は、お客様に来て



二〇一六年に創業六六年を迎えた「べつぷの宿白菊」代表取締役社長の西田陽一氏は、「おんせん県観光誘致協議会」の会長として広く大分県全域の観光振興にも努めている。

ただでございました」

実際、一一年当時で県の観光予算は、四七都道府県中、下から二番目だったという。

「団体旅行から個人旅行が主流になるなど、状況が少しずつ変わるなか、危機感がありました。ネームバリューと温泉だけの受け身の観光地ではなく、これからは情報発信やまちにある宝を磨き上げていくことが大切。何よりも大分県全体でまとまり、官民一体となってやりましたよと、由布院温泉



「ホテルニューツルタ」の代表取締役社長の鶴田浩一郎氏（左）と、経営企画室長の鶴田宏和氏（右）。後ろはホテルの近く、歓楽街の一角に建つ1879年創設（現在の建物は1928年築）の市営共同浴場「竹瓦温泉」。登録有形文化財。

とともに知事に提言したのです」

「おんせん県」のキャンペーンは大きな反響を呼んだ。

「地震発生後、別府市は商売で被害を受けた者の窓口を設けました。こうした市の対応があったので、連携をとりながら迅速な活動ができました。『おんせん県』という礎ができて県とのパイプが生まれ、さらに別府市との信頼関係も地震を機に強化されたんです」

広告のインパクトに加え、七月にスタートした「ふっこう割」の効果もあり、別府の観光客数は、

夏には前年を上回るほどまで回復した。しかし、今後の課題は少ないと西田氏は話す。

「二つは、行政との信頼関係の継続です。行政の担当者は二年、三年おきに代わるので、それでも続けられる仕組みを作りたい。一番大切な人の力を集約できる組織づくりが必要なんです」

女性にターゲットを絞った展開、官民が手を組んでの観光案内所の運営など、西田氏が思う未来への課題は尽きない。

「とにかくこれからは、より細かい部分に手をかけていくことを考えています」

### 地域性や個性を活かした取り組み

行政との連携と両輪をなす個別の取り組みの重要性を話すのは、一九一八年創業「ホテルニューツルタ」の代表取締役社長である鶴田浩一郎氏と、経営企画室長の鶴田宏和氏だ。

浩一郎氏によれば、別府は温泉ミュージアムとあっていいほど泉質が多彩だ。「別府八湯」という



標高400mと別府温泉のなかではもっとも標高の高いエリアに位置する「明礬温泉」は、湯の花を採取するためのわらぶき屋根の「湯の花小屋」（下）が立ちならぶ。

市内八カ所の温泉場は、秘湯的な雰囲気、ひなびた湯治場の味わい、海岸沿いの南国リゾート的なエリア、さらには駅前や歓楽街の中などそれぞれ異なる特徴がある。

「二〇年前は、お客様の求めるサービスが均質で、どのホテルも一泊二食付きの団体向けという同じコンセプトでした。今は、『温泉の聖地』という一枚看板があった上で、個々の宿が自らの個性とマーケットを想定し、努力を重ねており、多様でおもしろくなっていきます」

現在、年間約二四〇万の宿泊者のうち、一〇%以上が海外からの旅行者だと話すのは宏和氏だ。

「私どものお客様は、特に外国の方が多く、三〇%以上になりま

したので、彼らのニーズに合わせて、夕食抜きの一泊朝食付きの個人向けのプランを主流にしています」

インバウンド客、中でも韓国からの来訪者が多勢を占めるシーンもあるとのこと。大分空港に韓国のLCCが乗り入れるようになって以来、東京より安くて近いとソウル圏からの二〇代の若い個人旅行者が伸びてきたという。

「二〇年後の二〇二五年頃にはアジアのミレニアル世代（現在一〇代後半〜三〇代前半、アジアでは人口が爆発的に増加）が、世界の旅行・観光の主役になります。いかにこの世代の価値観を経営に取り入れていくかが、これからの課題ですね」

宏和氏の描く未来を、浩一郎氏

居酒屋「旬ノ匠」代表の丸山徹氏。店は別府駅から徒歩圏内の歓楽街にあり、地元の山海の幸はもちろん、大分県産の日本酒や焼酎の揃えも充実している。



が継いで話した。

「別府が本気で国際的観光地になるには、どうすればいいのか。世界に向けて何を磨き、どうプロモーションするか、どんな温泉地になるのかを突き詰めていくことが一番重要だと思っています」

地場に根付いた歓楽街からまちの活性化を図っているのが、居酒屋「旬ノ匠」の主人、丸山徹氏だ。「別府は観光地なのに、観光に力を入れてこなかった。温泉と歓楽街だけでなく観光地として他県から人を呼べるイベントの必要性をずっと言い続けてきました」  
それでも多くの観光客が訪れるのが別府温泉のブランド力。



瀬戸内海に面した別府は、温泉につかりながら山と海の双方の景色を望めるのも魅力のひとつ。写真は海岸沿いの足湯。

「例えば、年末はこの宿も満室ですが、店は休みが多くて宿泊客は夜に遊びに出かけるところがない。そこで一五年前、何軒かの居酒屋に声をかけて、十二月三十一日に屋台を出してもらって『べっぶ屋台村』を始めたんです。今では毎年来る人がいるほどのイベントになりました」

また、ゴールデンウィークには、「べっぶGWカーニバル」という家族向けのイベントを海岸沿いの公園で始めた。このイベントは、観光だけでなく、GW中こそ稼ぎ時の観光業に携わる地元の家庭からも感謝されている。どこかに外出したい子供たちを、このイベン

トに連れ出せるからだ。

「別府はこれから、まだまだ発展しなくてはいけない。若い連中は、今何かをしなければとみんな思っている。そんな彼らをイベントに少しずつ引っ張り込み、お客さんの反応を肌で感じてもらいたいと思っています。今は種をまいていく時期です」

と話しながら、丸山氏は笑顔を見せた。

### 温泉観光地ゆえの 多文化共生力

別府温泉は、地元の人々の気質をも培ってきたと語ってくれたのは、

福岡県出身の別府市観光協会の堤栄一郎氏だ。

「別府は、生活文化に温泉が根づいています。家にお風呂があっても、共同湯に行く。温泉はあつて当たり前。しかも、ほぼ源泉かけ流しです。そこにかつての私のように知らない人が入ってきて、自然に受け入れ、会話が始まるのが別府の人の良さなんです。さらに、子供だけの利用も多く、地域のおじいさんやおばあさんが面倒をみたり声をかけたりと、共同湯が地域のコミュニティーの場になっています」

人が集まるなら、ということでも共同湯に公民館が設けられ、さら



別府市観光協会業務課長の堤栄一郎氏は、「文化的なつながりは自治体の枠ではおさまらない。今後は九州全域を巻き込んでいきたい」と周辺との広域連携をはかる。

別府市長の長野恭紘氏は、「ほかの温泉地との差別化により、観光客を単に増やすのではなく満足してもらうことを目指したい」と話す。



にはお地蔵様もまつられている。

「入浴後、お参りして帰るんですよ。とてもすてきな光景です。温泉に対する感謝の気持ちが見えませぬ」

自分の家と同じくらい大切にしている共同湯を、地元の人には観光資源とは意識していなかったそう。それが、観光客の利用が増えるにつれ、駐車場を設けたり、スタンプラリーを始めたりと、少しずつ対応が変わってきたそうだ。

今後滞在型観光客の増加を考えると堤氏は、自らが観光地域づくりマネージャーを務める「豊の国千年ロマン観光圏」（別府、宇佐、中津、豊後高田など八市町村が連携し、広く文化的なつながりで魅せようという取り組み）にも期待を

寄せている。

別府の人々やまちの魅力、そして未来へのビジョンを語ったのは、市長の長野恭紘氏だ。

「観光地である別府は、様々な文化の交流地点として情報も人も集まる。何でも受け入れ、独自にアレンジしながら最終的には自分のものにしてきたのが別府の文化であり、それによって昔から経済が発展してきたと思っています。多文化共生こそが別府市の特徴です」

この特徴が最大限活かしたのが、二〇〇〇年に開校した立命館アジア太平洋大学（APU）だ。

「学生の半分が、留学生というコンセプト。約八〇カ国・三〇〇〇」

「別府地獄めぐり」のひとつである「かまど地獄」では、砂蒸しをはじめとする足湯の利用客が絶えない。



人ほどの留学生がいますが、別府だからこそ成功したのだろうと、副学長の今村正治先生がおっしゃってくれました。さらに、留学生たちがそれぞれの故国で別府を語るにより、インバウンドにも良い影響がもたらされると思っています」

市の人口は、県内二位の約一二十万人。ピーク時（一九八〇年）の約一三万人から、緩やかに下降線を描いている。その打開策のひとつとして長野氏が掲げるのは、APUを含めた市内三つの大学の卒業生たちが働きたいと思える場所の構築。さらに、子供たちに、別府の歴史、伝統、文化、産業、人物について体系立って伝える「別府学」を一七年度からカリキュラムに導入するべく調整を進めているという。

「子供たちは、小中学校の九年間で別府に関する知識を徹底的に磨きます。地元のことをきちんと知らなければ愛着も持てません。これこそが、地方創生の原点だと私は思っています」

さらに長野氏は、言葉を継ぐ。「今回の地震というピンチを経



「別府八湯」のひとつで、昔の湯治場の面影を残す「鉄輪温泉」は、国の重要文化的景観に選定されている。蒸気を利用した「地獄蒸し」料理も体験できる。

て、官民ともにまず自分たちでできることをしようという意識が生まれました。これからの観光政策を展開していく上で、これがすごく大きな武器になると思います」

### 連携の心を支えるのは まちが持つ力

別府市から観光バス「ゆふりん」で一時間ほど山道を進むうち、眼下の雲の切れ間に、美しい田園風景が見えた。桃源郷を彷彿とさせるやさしい景色、それが由布市の由布院温泉（以下「由布院」と記します）だった。

震災時には由布市各所で断水が



由布市の旧庄内町地区では棚田が多数見られ、四季折々、美しい眺めが広がる。



「由布院は見せ場が数多くある」と話す旅館「草庵秋桜」の代表取締役太田慎太郎氏は、長期滞在客のもてなしの一環として周辺を巡るエコツアーのNPO法人を2015年に立ち上げた。

発生するなど大きな被害が出て、年間約四〇〇万人に達する由布院の客足も一時途絶えた。流れが変わったのは、別府同様に「ふっこう割」の登場以降だと話してくれただのは、一七年に創業三〇年を迎える「草庵秋桜」の代表取締役の太田慎太郎氏だ。

現在、通常営業を行っているも

の、追々全面改修が必要な状況だという。

「地震によって経年劣化が一気に進んだ感じだ。由布院全体も、同様に必要だと思いつつも今まで形になっていなかったことが一気に動きだしました。植えていた種が、地震で芽吹いた感じなんです」

由布院が目指してきたのは、滞在型の保養温泉地。そのスタンスは震災後も変わらない。しかし、マーケティング情報の集約、熊本県黒川温泉との広域連携をはじめ、何年かかけてゆっくりと考えていた課題が速いテンポで動き出しているという。さらに、

「震災の翌々日、ぱつと晴れ渡ったんです。当然ながら道には観光客が一人もいなかった。その景色には、僕を含めてみんな感じるものがありました。これまでは、由布院はお客様に選ばれ、経済が回っていたので、地域に力があるという感覚が少なからずありましたが、それが一瞬ではがれました。同時に、自分たちはこういう静かな空気を守るべきなのだ、気づかされたんです」

震災の影響で、いまだに営業を



「由布院だからこそ、このまちで商売をしてきたからこそ、安心して再開を目指せるんです」とポジティブに語る「ゆふいん 山荘 わらび野」の支配人高田陽平氏。

中止している宿もある。「ゆふいん山荘 わらび野」もその一つだ。

「最初の三日間くらいは、ぱつとしていました。五月二十日に営業再開の目標を立てたものの、水も出ない、温泉も出ない状況では、どう考えても無理でした」

そう話すのは、支配人の高田陽平氏だ。半壊状態の宿の全面的な建て直しを予定しているが、まだその目処が立っていない。とはいえ高田氏いわく、まちの力が自分の背中を押ししているという。

「すごいなと思うのは、地震からたった三カ月でお客様が戻ってきた由布院の地力です。ここで商売をさせてもらっていることのある方がたさを感じましたね。先人たちが

がこの環境を残してくれたことに感謝しています」

地震から二日後には地元の人々がボランティアで集まった。

「自分の家も片づいていない状態の中で、他の旅館の従業員さんをはじめいろいろな人が次々と来られて、がれきを処理していただいた。本当にありがたかった。誰かが大変な状況だとわかったら、みんなが駆けつけてくれる。由布院はそういう地域なんです」

紆余曲折を経ての心境だと察ししつつも、極めて前向きな姿勢に感銘を受けた。

「由布院の観光についてあらためて考えたのも、この地震がきっかけです。老朽化していた宿の建て



「由布市まちづくり観光局」専務理事兼事務局長の森光秀行氏（右）と、事務局次長の生野敬嗣氏（左）。2017年には、後ろの由布院駅左手にカフェを備えた新たな観光案内所が完成する。

### 自治の意識が育んだ 由布院温泉の歩み

直しに思い切りがついたというか、つけざるを得なかったのが正直なところですが、どういったものができるか自分でも楽しみです」

太田氏、高田氏が語る由布院への思いは、その成り立ちからくる自治意識の強さが支えていると話



上／由布院のまちを走る観光辻馬車は、1975年の地震で観光客が途絶えた際、復興のシンボルとして誕生した。（写真提供：由布院温泉観光協会）  
下／九州の玄関口である博多駅とも直結している由布院駅。駅舎の設計は大分県出身の磯崎新氏。

すのは、「由布市まちづくり観光局」専務理事兼事務局長の森光秀行氏と、事務局次長の生野敬嗣氏だった。森光氏によれば、話の発端は四〇年前に至る。

「由布院の有志がヨーロッパを視察し、ドイツの事例などを参考にしながら自然とともにある保養温泉地を目指そうとしたんです。彼らは由布院最大の特徴であるやわらかな景色を踏まえ、他の温泉地に先駆けて景観条例を設けるなど、行政と協力しながら住民を引っ張り、ブランド力のあるまちを創り、それを大切に守ってきました」

生野氏は由布市の出身だが長らく他県で働き、十数年前に転職してきた。その時のことが、今も忘れがたいという。

「常に前向きに、何で地域のことをこんなに一生懸命にやれるんだろう、ここまで熱く語れるんだらうと、とても衝撃を受けました。そんな熱い人たちと一緒に仕事をしたいと旧湯布院町に転職したのです」

お二人が勤めている「由布市まちづくり観光局」は、外国人を含め観光客数が増加し、今後のまちの在り方について皆が考え始める中、官民一体で観光に力を注ぐため一六年四月に設立。一七年には由布院駅横に新たな観光の拠点（観光案内所）が完成する予定だ。

「これまで、由布院の観光は民間主導で行政は裏方でしたが、これからは、より緊密な連携が不可欠で、由布市全体の観光という観

点も必要です。単に観光客数を伸ばすのではなく、昔から言われ続けている『住んで良し、訪れて良し』という大切なポリシーを、官民一体で将来につなげていきたいと思っています」と生野氏もまた抱負を熱く語ってくれた。

### 合併がもたらした 新たな産業振興

由布市は、〇五年に旧挾間町、旧庄内町、旧湯布院町の三つの自治体が合併して生まれた。人口は

由布院温泉の景色を彩る「金鱗湖」は、湖底から温泉と清水の双方が湧き出ている影響で、冬場には湖面が霧に覆われることも。



「由布市が目指すのは、懐かしいふるさとのような景色。日本人だけではなく海外からのお客様も自然とふれあうなかで心を癒やせる観光地」と話す市長の首藤奉文氏。



約三万四〇〇〇人。別府同様に緩やかに減少している。

「由布院は、おもてなしの心がよくあらわれている地域。庄内は農業の町で、お互いに助け合う温かみがある。挟間は商業の町であり大分市のベッドタウンとして、若者が多く住む町です」

それぞれの地域の特徴をご案内していただいたのは、合併当初から市長を務める首藤奉文氏だ。合併から一一年が過ぎ、市民の間で「由布市」がなじみある存在になってきたと顔をほころばせる。

「一体感が生まれてきていますね。人の絆が、産業振興につながっている。例えば、由布院の観光が

発展すれば庄内や挟間の雇用が増えるし、庄内の農産物や挟間の商工品を由布院で消費できる。三つの地域が一つになることで、新たな経済の流れができて上がっていくんです」

庄内で継がれてきた伝統芸能の神楽、絶景が広がる挟間の「由布川峡谷」など、合併によって得られた「地元の観光資源」が、由布院温泉の滞在客にとって新たな魅力となる効果も生まれた。

庄内を含め農業地域は、高齢化や後継者不足による過疎化や耕作放棄地等、直面する課題は多い。一方で新しい観光資源が成長しつつあるという。

「農家民泊です。現在、約三〇軒の農家が受け入れています。特に高齢者の方たちが、進んでこの取り組みに参加しています」

実は庄内、挟間と市内全域に温泉が湧いており、農家民泊でも温泉を楽しめるのだとか。また、観光を柱とする自治体としては、庄内にある大分県立由布高校に、高校としては全国初という観光コースが設けられたことが興味深い。

「机上だけではなく、実際に現場に行って汗を流し、何が大事かを学べるのが魅力です。未来に向けて何をしなければいけないのかを、きちんと分かった子供たちが増えてくると思っています」

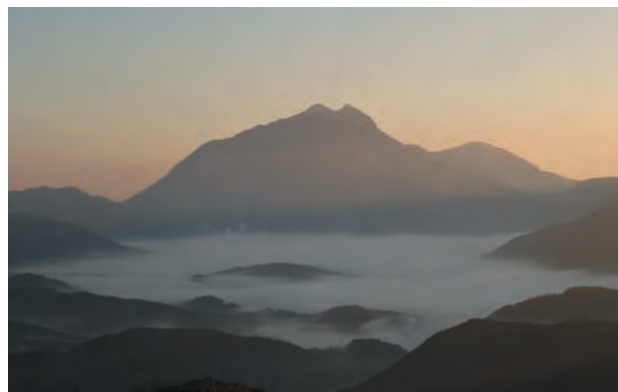


江戸時代末期から継がれてきた「庄内神楽」は、12の神楽座が残る。2008年の「第32回全国高等学校総合文化祭」では、庄内地区にある大分県立由布高等学校郷土芸能部の神楽が文部科学大臣賞に輝いた。(写真提供：由布市)



3000坪の敷地に離れが点在する旅館「玉の湯」の代表取締役社長である桑野和泉氏は、由布院温泉観光協会会長として若手とともに未来のまちの在り方を真摯に考える。

秋から冬にかけての冷え込む時期、標高450mの由布院盆地は朝霧に包まれる神秘的な光景が広がる。(写真提供：由布院温泉観光協会)



「九州」として心をひとつに

最後にお話を伺ったのは、「玉の湯」の代表取締役社長であり、由布院温泉観光協会の会長も務める





鶴見岳をはじめ連山に囲まれた別府市。国際的な音楽祭や芸術祭も開催され、国際観光温泉文化都市として進化を遂げている。

桑野和泉氏だ。今回の震災を経て、九州という絆をあらためて認識したと桑野氏は話す。

「今までは、自分のエリアを磨き、お客様をお迎えすればいいという視点が強かったと思うのです。でも、お互いに協力連携することの大切さに皆さんが気づいたんです。私自身も九州全体という捉え方の中で、横をつなぐことの重要性をあらためて思った次第です」

今回、甚大な被害を受けた熊本県は、九州の観光の心臓部ともい

える存在だった。

「熊本や阿蘇の観光関係者の方からは、地震直後で、自分たちはお客様をお迎えできる状況ではない。でも、周りまで沈んでしまうと、今後産業自体が成り立たなくなるので、まずは私たちに頑張ってくれと」

被災とは全く関係のない鹿児島や長崎でも、一旦客の流れが途絶えた。大分県内でもまた然り。「別府、由布院に泊まれないなら、お昼や夜の会食をやめたい」というキャンセルが周辺で生じたそうだ。苦境に陥った五月の連休の別府、由布院を支えたのは、県内からの観光客だ。

「とても励みになりました。県民が手を差し伸べずして、誰が地域を支えるんだという感じですね。『おんせん県』が定着してはいましたが、今までにはなかった動きです。危機感を共有したからこそその結果だと思っています」

震災を経て少しずつ状況が変わりゆく中、由布院では、一九七五年に始まったものの、七年前に一旦途絶えていた音楽祭が復活した。

「昔の由布院は、緩やかに時間が

流れ、来ていただいた人たちと時間を共有していました。音楽祭の持つ独特の空気感の中でお客様をもてなすだけではなく、自分たち自身もその時間を過ごしたい。さらには、音楽祭を知らない若い世代の地元の人たちに体験してもらいたいという思いがあります」

「玉の湯」も、わずか一七室の客室をさらに減らす計画があるなど変化が見られている。

「滞在型保養温泉地を目指す由布院に必要なのは静けさ、緑、空間なんです。一つ部屋数を減らすことで、静けさや緑のボリュームが違ってくるんですよ」

それぞれの旅館で新たな取り組みが行われる中、話し合いの課題となるのは「ふっこう割」が終わる来年以降のことだ。

「地震前日の四月十五日時点で戻るのいいのかというと、決してそうではない。私たちがすべきなのは、本来の由布院の姿に戻すことだと考えています。観光客が途絶えた今年の五月は、緑がとてもしきれいでした。また、ホテルもよく飛んだし、夏は青空も美しかったです。昔はそれが普通だったのかも



その美しい姿から「豊後富士」とも呼ばれる標高一五八三mの由布岳は、由布市の景色の象徴。山頂からは別府湾が望める。「阿蘇くじゅう国立公園」の一部。(写真提供：由布院温泉観光協会)

しれない。そんな美しい環境の中で、お客様をお迎えしたいとあらためて思いました」

別府市、由布市をめぐりながら随所で思い出したのは、「雨降って地かたまる」ということわざだった。震災を経て、全国に冠たるブランド力を見せていた人の力があらためて輝きを見せている。温泉のごとく、そこかしこであふれる熱い思いは、二つのまちの未来を開いていく。